

平成20年度 継続評価書

研究機関 : (株)日立製作所、日本電機(株)
研究開発課題 : ネットワークを通じた情報流出の検知及び漏出情報の自動流通停止のための技術開発
研究開発期間 : 平成 19 ～ 21 年度
代表研究責任者 : 田代 勤

■ 総合評価 : 適(適/条件付き適/不適の3段階評価)

■ 総合評価点 : 30点

(総論)

- 順調に研究開発が実施されており、その成果は製品に反映されるなど具体的である事から、引き続き事業を推進する事が適当と思われる。
- 実証実験における検証される定量的達成目標、および、その妥当性にたいする検証を早期に行うこととして、本研究開発を推進することが適切。

(コメント)

- 実用化に向けたロードマップをより明確にする事が望まれる。
- 実環境における利害得失が検証できるような形で次年度の大規模実験を進めて欲しい。
- 研究開発の大目標、および、ブレークダウンした目標については、概ね良好な目標設定が成されていると考える。しかし、総合連結試験である StarBED における実証実験において、設定される定量的目標、および、その妥当性に対する検証が不足していることは認めざるを得ない。そのため、事業を進めることは適当であるが、StarBED における実証実験をお実施するまでに、その検証目標の明確化を早急に行い、かつ、追加開発やチューニングが必要となることも考慮した手順を提示し、実施すべきである。

(1) 当該年度における研究開発の目標達成(見込み)状況

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 6点

(総論)

- ファイル共有ソフトの現状調査、トラフィック制御技術の開発、マーキング技術のいずれも計画通りに進んでおり、実験用ネットワークでの検証も進んでいる事から、年次目標はほぼ達成されている。
- 当初予定された成果が得られているが、現在のインターネットの状況を反映した目標設定の検証が必要。

(コメント)

- 報告書を見る限り、研究開発は順調に進んでおり問題は無い。
- ファイル共有ソフトの機能調査や可視化の手法は、今後登場するであろう新しいソフトに対しても迅速に対応できるように考慮しておく事が望ましい。
- 開発された2つのマーキング手法の関係がやや不明確である。単に独立の2つの手法にとどまるのか、統合の可能性があるのかがはっきりしない。
- インターネットの利用形態は年々変化しており、特に利用者側でのネットワーク接続やシステム性能に格段の改善が見られる。これらの現状を謙虚に受け止め、開発システムの性能目標の妥当性検証を行い、必要に応じて改定することが必要。特に、本プロジェクトでは、実用的な技術提供・社会展開が最終的な目標であることを強く意識すべき。
- 成果の社会展開の実状が、定量的に提示されるべき。特に、本研究成果が組み込まれたシステムの社会展開状況が定量的に与えられるのが望ましい。

(2) 当該年度における研究資金使用状況

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 5点

(総論)

- 研究資金使用において特に問題のある点は見受けられず、予算計画書に則った効率的かつ適正な執行が行われている。
- 計画等に基づき、効率的かつ適切に執行されていると認めうる。

(コメント)

- 開発に偏った予算の執行となっているのは、プロジェクトの性格上やむを得ないかもしれないが、もう少し研究発表など社会へのフィードバックのための予算も考慮した方が良かったのではないかと。

- 年度当初に予定した全てのサブプロジェクトが実施され、かつ、予算不足あるいは、予算過多が原因となる実施障害は認められなかった。

(3) 研究開発実施計画

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

- 計画は具体的であり、着実に進むと思われる。十分に実行可能であり、効率的な計画であるが、厳しい見方をすればチャレンジングな点が少ないとも言えるであろう。最終年度であることから、次年度の計画と実用化に向けたロードマップとの整合性がより明確に示されるとさらに良かったのではないか。
- 昨年度継続評価で指摘された項目を組み入れ、適切な計画の見直しと実施が行われたと認めうる。

(コメント)

- 大規模な実験ネットワークで得られる結果は、本当に実用化に向けて必要なものであることを明確にして欲しい。今年度の小規模ネットワークで得られた知見とさほど変わらないのならシミュレーションで十分ということになってしまう。大規模ネットワークで実験を行うなら、対策が施されていない実環境に本成果を実際に導入する際に何が起きるのが検証できると非常に説得力が有る。
- 最終年度を迎えるにあたって、本事業成果の実用化へのステップと次年度の成果がどのように結びつくのかがより明確である事が望ましい。
- 基本的には良くできた計画で、十分評価できる。
- 計画実施における目標設定では、できる限り定量的な目標を設定し、かつ、その設定理由について合理的な理由説明が行われると、より計画の妥当性が理解されやすい。さらに、設定目標値について、現在のインターネットや社会の状況、また近未来予測値を適切に反映することが必要である。

(4) 予算計画

(SABCD の5段階評価) : 評価 B

評価点 : 5点

(総論)

- 予算計画は特に問題は無く積算額も妥当である。
- 適切な予算計画が行われている。

(コメント)

- 実証実験等の成果社会展開に必要な事業についての、研究開発状況に応じた予算重点配分の可能性もあったのではないかと。

(5) 実施体制

(SABCD の5段階評価) : 評価 A

評価点 : 7点

(総論)

- これまでの成果を見る限り実施体制は適切であり、次年度も計画通りに事業の進捗が見込まれ、着実に成果が上げられると期待できる。
- 適切な実施体制があると認められる。

(コメント)

- 昨年度の指摘にもあるが、2つの組織が異なる観点から研究を進めた成果をお互いに生かせるような仕組みづくりが大切だと思われるので、今後ともさらに努力して欲しい。
- 成果を見る限り、それぞれの組織は非常に効率的に動いているようだ。
- 最終年度における、社会展開しうる成果の創出を考えた場合、単純な機能開発だけではなく、組込総合試験、可能性のある利用者からの意見聴取、追加開発などの、本当の意味でのロールアウト作業が組み込まれていることが望ましい。特に、開発チームと、実証実験チームの役割を適切に考え、そのための動的資源再配置も可能な計画であれば、更に良い計画となったのではないかと。